

●令和6年度「税に関する作文」西宮市長賞受賞作文

【題名】「当たり前の生活」

【学校名・学年】西宮市立西宮高等学校 1年

【氏名】梅野 なな

高校生になり、義務教育ではなくなった。公立の学校であることに変わりはないから、金銭面で違いはあまりないだろう。そう考えていた。

高校に進学してから、教材の量が莫大に増えた。家に教科書が届いたとき、私は絶望した。こんなに勉強をしなければならないのかと。そんなことを考えながらなんとなく教科書の裏を見ると、そこには本の値段が書かれていた。英語の参考書一冊だけで二千元。中学生の頃までは「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって支給されています。大切に使いましょう。」と書かれていた。しかし、高校の教科書にはその文字がない。小学校一年生のときから九年間親しんできた文字が無くなっていた。疑問に思った私は

「教科書って自分でお金払うの？」

と母に尋ねた。すると、

「当たり前でしょ。義務教育じゃないんだから。」

とすぐに答えが返ってきた。今まではもらえるものだったのに、突然お金を払って購入するものになった。当たり前だったことが当たり前ではないことに気がつけた瞬間だった。そこで改めて税金のありがたみを感じられた。

私のように税金を使わせてもらっていることに感謝をしている人は多い。しかし、税金を支払うことに良いイメージを持つ人は少ないだろう。私たち高校生が普段払っている税金といえば、消費税が頭に浮かぶ。正直言って支払いたくない。私は五十円の駄菓子をたまに購入するが、レジでは五十四円を支払わなければならない。「全然五十円じゃないじゃん」と内心思いながらも仕方なく払っている。しかし、この何気なく払っている四円。これが小中学生の教科書や私たちの学校、住みやすい街に姿を変えていく。

毎日学校に行き、空調の効いた教室で授業を受け、部活をする。こんな当たり前の生活は私たち国民から少しずつ集めた税金から成り立っている。これからは、支払いをするときには嫌な顔をせず、「自分も他の人の当たり前の暮らしに貢献できている」という事実を誇りを持ちながら税金を払おうと思う。